

新作狂言と狂言普及活動に関する現状と展望

網本, 尚子

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽の現在と未来 (能楽研究叢書 ; 5)

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

237

(終了ページ / End Page)

249

(発行年 / Year)

2015-11

新作狂言と狂言普及活動に関する現状と展望

網本 尚子

一 茂山千之丞の遺した言葉と新作狂言への期待

今回新作狂言の一覧を作成するにあたっては、「能楽タイムズ」の「今月の能」欄に「新作」として掲載されていたものを中心にまとめた。ほとんどが未見の舞台であるため、狂言師が出演していても、果たして狂言と呼べる作品なのかどうか判断できない曲も多く、結果的に一覧に記載しなかったケースもある。実際はもっと多くの作品が発表されていると考えられ、また、「能楽タイムズ」に最初に掲載された時を初演と判断し、インターネットサイト等により確認をとる方法でまとめたが、実際の初演年月と齟齬をきたしている場合もあるかと思う。別の機会に、狂言各家のご協力をあおぎ、より詳細な一覧をまとめられればと思っている。

さて、一覧を見ると、茂山千五郎家による新作の上演の多いことがわかる。今回は、初演に限って一覧を作成したが、再演まで含めると、ほぼ毎月、千五郎家によって新作が上演されているようである。これは、新作狂言の制作や演出、異分野との交流に積極的だった、故茂山千之丞の活動の流れを受け継いだものと思われ、興味深い。

千之丞は著書『狂言じゃ、狂言じゃ！』^(注①)の中で、「狂言を野垂れ死にさせないために」として、まず狂言の間口を広げることを挙げ、新作狂言を生み出すこともその一つの手立てだと述べている。ただ、多くの新作狂言が作られてはきたものの、再演を重ねるような曲は少なく、その中で唯一人気

① 晶文社・2000年

曲となったのが、飯沢匡による「濯ぎ川」だとする。しかし、「新作」というサブタイトルなしでも狂言として観客に受け入れられてしまうようになった、つまり、狂言としてこなれきってしまった「濯ぎ川」は、彼の考える新作狂言とは別のものになってしまったと述べ、「濯ぎ川」は、単に狂言のレパートリーを一つ増やしただけに過ぎず、狂言の未来像にプラスとなったかどうかには疑問が残る、さらに、新作狂言には従来の狂言の持っていない要素を盛り込むことが必須条件である、との見解も示している。千之丞は注目する新作狂言として、帆足正規作「維盛」や「死神」など、いずれも現代的な思想・哲学に裏づけされた作品を挙げており、思想性の乏しい狂言に、強烈な風刺や体制批判という新しい要素を取り入れたような作品が、今後、狂言の新しいレパートリーとして残っていく新作狂言になるだろうとも述べている。

また千之丞は、2009年能楽学会東京例会においても、狂言の新作について以下のような考えを述べている。^(注②) 狂言の特色は不条理性にあり、「狂言の枠の中に新しいモチーフや台詞、使いたい言葉を無理に押し込んだり、西洋的合理性に影響された近代的感覚で狂言を書いて、結末を付け」たのでは失敗してしまう。「結末がはっきりせず、不条理な世界があっけらかんと明るく存在する」のが狂言なのであり、狂言を知り過ぎている人間が書くとかえって失敗することが多い、との指摘はなるほどと思われた。この例会には、残念ながら私は出席していなかったのだが、千之丞が演出を手がけた、梅原猛作の一連のスーパー狂言「ムツゴロウ」、「クローン人間ナマシマ」、「王様と恐竜」についても触れられたことと思う。初演時には賛否両論のあったスーパー狂言だが、まさに千之丞の考える、強烈な風刺や体制批判の要素を持つ新作狂言そのものであり、これらについて千之丞がどのように振り返ったのか、その場に身を置いて実際に聞いてみたかったと思う。

さて、千之丞も述べているように、従来の古典狂言の様式・構成の中へ、

② 三宅晶子「例会ノート」(『能と狂言』第8号・2010・4)より

単に新しいストーリーやモチーフを持ち込んだだけでは、後世に残るような新作狂言にはなり得ない。企画者や作者は、「なぜこの素材を狂言という形式でやる必要があるのか」、「新作狂言を作ることによどのような意義があるのか」という問いに対して、常に明確に自答しながら新作狂言に取り組む必要があるだろう。

千之丞はまた『狂言じゃ、狂言じゃ!』で、期待する今後の新作狂言の姿を、「狂言の形をとった現代の演劇である」とも述べている。現代の演劇や芸能のジャンルには、狂言と同様、笑いを要素にしたものも多い。たとえばコントなどは、登場人物の人数が少なく、舞台装置も簡素で、上演時間も短いという、きわめて狂言と近い位置関係にある形式の演劇で、しかも、若者の人気が高い。

そのコントと狂言の関係について、千草子がきわめて興味深い指摘をしているので紹介しておきたい。^(注③)千が取り上げたのは、インパルスというコンビが演じたコント「葬式」である。あらすじはこうだ。父親の葬式に、坊主が頭にたんこぶを作り、袈裟も衣も乱れた状態で遅れてやって来る。坊主は心配する喪主に対して、「ただチンピラにからまれただけ」と静かに答え、読経を始めるが、お経の合間にチンピラへの文句・不満、罵詈雑言をぶちまける。驚いて遮る喪主に、坊主は冷静に「なんでもない」と答えるが、相変わらず木魚を乱暴に叩き、悪口をぶちまけ続ける。千は、聖職者の俗人以上の俗っぽさや、人間の本音を描いた本作品は、まさに狂言の出家座頭物に通じる構成の作品であると指摘する。さらにアンジャッシュの「社長の椅子」というコント作品も紹介しているが、ここではあらすじは省略する。二人のサラリーマンが社長の留守中に社長の椅子をこわしてしまうという内容で、「附子」を思わせる雰囲気のある作品だと言う。千は、これらのコントを作った若手芸人たちが狂言を知っていたとも、真似たとも思えず、狂言が保

③ 「狂言鑑賞法の`現在、平家語り「白声」からインパルス・アンジャッシュのコントまで」(『能楽タイムズ』2013・4)

持してきたくすぐり、どんでん返し、人間行動の分析力が、まったく狂言として意識されることなく若手芸人にコンセプトとして選ばれ、若者の共感を得ていると述べ、「狂言が今あるような名作ではなく、新作として初演された頃は、インパルスの『葬式』やアンジャッシュの『社長の椅子』のように、人々の当座の笑をとっていたことを納得した次第である」と続けるが、まったく同感である。

このような狂言とコントとの類似性を考えると、あえて今、新作狂言を作る意義がどこにあるのか、という疑問が生じるのは必然であろう。現代の設定で、現代語で演じられる分、コントは狂言よりはるかにわかりやすく、テレビやYouTubeで気軽に見られるという点でも、狂言より優位性があるのは間違いない。当座の笑いをとるならば、コントで十分なのである。ならばなぜ、新作狂言という形式で演じる必要があるのか。そこには、コントでは表現しきれない何かが必要なのではないか。新作狂言の作者が、どこまでそれを自覚して制作に取り組むかが、千之丞の言う、狂言の未来像にプラスになる新作となり得るかどうかの鍵となるように思える。

また、新作狂言は、あくまで古典的狂言への入り口であるという自覚も必要であろう。目新しいことをやって若い観客の興味や関心を一時的に惹いても、後が続かなければ意味がない。次の展開を踏まえた上での新作の上演、という位置づけを忘れてはならないのではなかろうか。

そのためには、古典的狂言に入っていくための橋渡しの要素が、新作狂言には欲しいところである。狂言の不条理性を生かしつつ、なおかつ、従来の狂言にはない要素を内包した作品。千之丞の目指したこうした新作狂言の姿が、やはり理想的な新作と言えよう。現代の狂言として当代性を織りこむことはかまわないが、そこに現代的合理性やドラマツルギーを持ち込み、狂言らしさを失った作品を作ることは避けるべきである。

新作狂言を観ていて往々にして感じるのは、場面転換の多さである。それは、描かれる人間関係の煩雑さとも関連していると思うのだが、多くの場面によって一曲が構成され、登場人物が中入りを何度も繰り返し、そのたびに

場面が変わるといのは、狂言としてはむしろ不自然である。たとえば古典的な狂言「煎物」では、祇園祭の稽古場面だったものが、いつの間にか祭当日の場面へと転換する。時間経過を何一つ説明するわけでもなく、唐突に場面転換が行われるという、強引でありながら、実はきわめて自然に見えるこの手法は、狂言の「場面性」という特色を如実に表している。こうした手法は狂言らしさとして、新作狂言の中にも、むしろ積極的に取り入れるべきであると思う。そして、上演時間は短く、人物関係も筋立てもなるべくシンプルにすることが、狂言らしさを生かすポイントとなるのではないだろうか。

千之丞は、先述の能楽学会例会において、「狂言か否かに関わらず、再演を繰り返して劇として成熟し、古典化していくことこそが望ましい」とも述べている。一過性のものではなく、再演に耐え得る新作狂言の登場に、今後とも期待したい。

二 新作狂言の題材と台本作成者

菊池善太は、「翻案狂言による西欧文学受容」^(注④)において、西欧文学に由来した明治期以降の新作狂言を一覧にしてまとめ、考察を試みている。それによれば、西欧文学由来の新作狂言（翻案狂言）上演が活発に行われるようになったのは、飯沢匡の「濯ぎ川」以降だということだ。その後は、和泉元秀による「じゃじゃ馬馴らし」や野村万作による「法螺侍」（高橋康也作）などのシェイクスピア翻案ブームがあり、21世紀以降は、茂山千五郎家によるアンデルセン、イソップ、チェーホフなど、さまざまな作家の翻案上演が目立つとしている。

今回作成した一覧曲中では、アンデルセン「裸の王様」の翻案「はだかの殿様」（作 松本薫、主演 茂山正邦）や、チェーホフ「結婚申し込み」の翻案「ぶろぼおず」、同じく「熊」の翻案「熊」（いずれも作 森崎一博、主演 茂山正邦）などが翻案狂言に分類される。また、菊池は論考の中で新作

④ 『日本大学大学院社会情報研究科紀要』第15号・2014・7

狂言として挙げているが、純粋な狂言とは言いがたいと判断して今回の一覧からは除外したものに、関根勝による一連の狂言&オペラの上演がある。「ハムレット」「リア王」「オセロ」などのシェイクスピア翻案物と「恋の良薬」「ひなどり花嫁」などのモリエール翻案物があり、狂言師の善竹忠亮、忠重、富太郎、十郎、佐藤融らが出演している。同じく、小宮正安による狂言風オペラも今回の一覧からは除外したが、菊池は狂言の作品として取り上げており、それによると、「フィガロの結婚」「魔笛」など、モーツァルトのオペラを狂言風にアレンジしたものだと言う。(茂山千之丞、あきら等の出演により上演)

翻案狂言以外で目につくのは、地域活性化と結びついた狂言の創作と上演である。たとえば、茂山千五郎家と滋賀県文化振興事業団の活動が結びついた「おうみ狂言図鑑」は、滋賀県の風物を題材とした狂言を制作し上演するイベントで、これまでに「鮎ずしの憂うつ」(作 土田英生)、「信楽たぬきの変身」(作 藤井組)、「続・鮎ずしの憂うつ でっち羊羹の陰謀」(作 大和屋かほる)、「安土城ひみつ会議」(作 三千院高穂)が作られ、継続的活動となっている。(2015年2月には三千院高穂の「MUKADE (ムカデ)」が上演されている)

小笠原匡による「千葉の羽衣」、「鬼の来迎」、「オトタチバナヒメ」、「水戸黄門と藪しらず」、「はごろもかたり」などの作品は、創作狂言と銘打たれ、千葉県に伝わる文化や伝承をもとに作られたものである。これらは、千葉大学、千葉県文化振興財団、千葉市文化振興財団、NPO 法人フォーエバーと小笠原との連携によるプロジェクトとして創作、上演されている。狂言師以外にも、狂言ワークショップを受講した千葉県民や、千葉大学の学生らも出演しているようだ。

名古屋での、やまかわさとみによる新作狂言の上演も、複数回を数える。「夢つくり」(演出・主演 佐藤友彦)は、名古屋城本丸御殿復元着工記念狂言会での上演、「轍」(演出・主演 同)は名古屋開府400年記念事業での上演、「冥加さらえ」(演出 佐藤友彦、主演 佐藤融)は、名古屋堀川ライオ

ンズクラブ設立十周年記念の狂言会で上演された。こうした、その土地ゆかりの狂言を、地元在住の作家が書き、地元の狂言師が演じるという興行は、ひじょうに意義深いものと言える。また、「冥加さらえ」では、オーディションで選ばれた地元の小学生も出演したとのことである。

地元の子どもを出演させる試みは、河合祥一郎作、野村萬斎監修・演出による「根日女」でも行われている。2015年5月の上演であったため一覧には記載しなかったが、「加西市播磨国風土記1300年祭」記念事業では、梅原猛による新作能「針間」と、新作狂言「根日女」が上演された。「根日女」に出演する子どものオーディションは1年前に行われ、選ばれた子どもたちは「こども狂言塾」で稽古を積んだ後、出演の運びとなったそうである。そこには、この公演を一過性のものとせず、能狂言を郷土に定着、普及させようとする加西市の強い意欲が感じとれる。

地域ゆかりの作品として作られた新作狂言には他に、「姫の髻取り」（糸魚川地域に伝わる古代伝説「奴奈川姫」をもとに創作）、「大和西瓜」（黒西瓜が大和郡山でアイスクリーム種西瓜と出会い、大和西瓜が生まれるという話。藪内佐斗司制作の仮面を着けて演じる仮面狂言）、「おさか」（「おさか」が転じて「おおさか」となった由来を狂言として創作）、「茨木童子」（茨木市に伝わる童子の出生譚をもとに創作）などがある。

「濯ぎ川」と同様、狂言師以外の作者の手になる作品は、最近も多く見られる。中でも萬狂言は、原案や台本を一般から公募し、野村萬蔵が演出して上演するという興味深い試みを行っており、2007年の春公演で横山一真作「瓢箪」、夏公演でやまぎわちひろ作「鳴大家守」、秋公演で中村朋子作「きれい好き」、冬公演で中谷智喜作「鬼は内」が上演された。

野村萬蔵家では他に、南原清隆らとともに「現代狂言」を上演しており、2006年から始まった同公演は、昨年度までで9シリーズを数え、全公演数も百公演を優に越えている。コントと狂言とを融合した「現代狂言」は、とくにコントファンの若い観客たちにかなり浸透してきたように見受けられ、

これらの観客を能楽堂での古典的狂言鑑賞に導くことにより、新しい狂言愛好者層の拡大につなげることが期待できるだろう。現代狂言に出演する芸人や俳優による古典的狂言の上演も行われており、昨年度は南原清隆、平子悟によって本格的な「棒縛り」も上演された。なお、平子は森一弥と「エネルギー」というお笑いコンビで活動しているが、平子が狂言師を演じる「狂言コント」によって、平成23年度国立演芸場花形演芸会銀賞を受賞している。また、現代狂言のメンバーでもあるお笑いコンビ「やるせなす」の中村豪は、2014年「萬狂言夏 ファミリー狂言会」で新作狂言「大福」の台本を書いている。

新作狂言上演の多い茂山千五郎家は、多ジャンルとのコラボレーションにも積極的である。中でも、劇団扉座主宰の横内謙介、リリパットアーミーII座長のわかぎゑふ、劇団MONO代表の土田英生ら、現代演劇で活躍する脚本家とのコラボレーションは目を引く。

千五郎家の若手が主催する花形狂言会は、実験的な公演の場として、とくに新作狂言の上演が多い。花形のメンバーである茂山逸平は、個人でも2010年より落語家桂春蝶との「春蝶・逸平の一緒に遊びまSHOW」を開催しており、落語をもとにした新作狂言を毎年上演している。

千之丞が目した新作狂言「維盛」、「死神」の作者である帆足正規も、「夢の酒」、「夢てふものは」、「歌ほめ」、「えれきてる」などを茂山千之丞、七五三ら千五郎家の演出によって上演している。なお、「夢てふものは」は国立能楽堂委嘱作品で、千五郎家の千之丞、あきら以外に、茂山忠三郎、良暢、野村小三郎（現又三郎）らも出演している。

その他、善竹隆司の「勘当息子」と「老人と木」は、手塚治虫の漫画『ブラックジャック』、茂山逸平の「ひめあらしい」は能「葵上」、茂山童司の「BLACK & WHITE」は歌舞伎「鳴神」をそれぞれ原作としており、新作狂言の素材の多様性がうかがえる。

野村万作の「食道楽」は、北大路魯山人の『春夏秋冬料理王国』所収の新

作狂言「食道楽」を、能楽堂での上演に耐え得る形に万作自身が改訂したものである。したがって台本自体は古いものだが、能楽堂での上演は初演であろうと考え、今回の一覧にも記載した。

三 狂言普及のための若手の試みと、今後の課題

先述のように、千之丞は、新作狂言は狂言を野垂れ死にさせないための方策の一つだとした。私のような狂言愛好者からすると、これほど長い期間保たれ続けた狂言が、野垂れ死にするような事態になるとはとても考えられないのだが、狂言師自身には、危機意識が意外と強いようである。たとえば野村万作は「能楽タイムズ」での竹本幹夫との対談で^(注⑤)、「私は常々、将来は『能より狂言の方が危ないぞ』と言うんですよ。それは、今話していたように、現代人の言葉の理解度がぐんと落ちてきているからです」と発言しているし、野村萬も同じく「能楽タイムズ」での羽田昶との対談で^(注⑥)「最近では、能舞台を離れて色々な所で会がありますが、そういった状況にも危機感があります。なぜその舞台でやるのか、ということを考えてやっているならいいんですが、下手すると、能舞台では通用しないようなものを方々でするということになりかねませんからね。〈生きる技術〉とは違う〈生き延びていく技術〉というのかな。能楽界全体で、普遍的な技術を獲得していくことが大事ですね。」と、狂言界の最近の流れに対しての危機感を述べている。

狂言を廃れさせないためには、若い世代に狂言愛好者を増やすことが、狂言界全体の急務と言ってよかろう。狂言の世界に身を置いていると、いかに能狂言が一般社会に浸透していないかということをつい忘れがちである。しかし、私が大学（経営学部）の授業で問いかけた際も、能狂言鑑賞の経験もなく、興味関心もほとんどない、と答える学生が大半で、この世代が社会の中心になる頃には、ますます狂言が一般社会から隔離した存在になりかねないのである。

⑤ 「能楽対談第 554 回 舞台生活八十年」（2014・3）

⑥ 「能楽対談第 560 回 芸道八十年」（2014・11）

最近、地方の小中学生に能狂言を見せる活動がようやく活発化し、能楽師たちは上演のため精力的に地方の小中学校体育館などに出向いている。また、とくに関東や関西では、小中学生向けの能楽鑑賞教室や体験教室も盛んである。早い段階で子どもたちを狂言に親しませることは、将来の愛好者拡大につながるきわめて重要な活動ではある。だが、大学生や社会人になってから自ら能楽堂へ足を運んだという若者は、果たしてどれくらいいるだろうか。子ども時代の鑑賞教室が唯一の狂言体験という者が、おそらく圧倒的であろう。私が教える大学生からも、どこで上演しているかわからない、チケットをどのように買えばよいかわからない、などという声を聞く。

そうした若者のためにも、チケットぴあやイープラスなどでチケットを買うことができる狂言公演が増えたことは、たいへん喜ばしい。また、『能・狂言事典』、『岩波講座 能・狂言』、『狂言ハンドブック』など、狂言のあらすじを調べられる本は多いが、若者たちがまず頼るのはそうした本ではなく、インターネットの情報である。これから能楽堂へ足を運ぼうとする若者向けに、入門的な情報を提供する充実したサイトを作ることも、今後必要になってくるだろう。

さて、名人たちが狂言の将来に危機感を持っているのと同様、若手の狂言師たちの抱く危機感も大きく、狂言普及のための努力は各家によって続けられている。関西では、千五郎家の若手たちの活動が顕著であるが、ここでは、東京での大藏流若手狂言師の活動を紹介しておきたい。

大藏教義は、2013年より目黒のHUB Tokyoを拠点として「狂言 LABO」の活動を行っている。ここは、もと印刷工場として使われていた場所で、およそ古典芸能を上演するような雰囲気ではないが、そのミスマッチが魅力的でもある。「狂言 LABO」は、教義によるレクチャーや簡単なワークショップの後、袴狂言が一番演じられるという構成になることが多い。そしてこの企画のユニークな点は、上演の告知をフェイスブックなどのSNSだけで行う、クローズドイベントであるという点である。また、上演中の写真撮影も自由で、それらの写真や感想を、自分のフェイスブックページに投稿したり

シェアしたりすることによって、フアンの拡大を図っていくという、SNSの発達した現代ならではの方法で運営されている。見たところ、観客の大半は狂言初心者のもので、フェイスブックに投稿された感想は、新しい体験に出会った興奮や喜びを素直に綴ったものが多い。そうした観客が、今回は友人を連れて参加するというケースもあり、回を追う毎に観客数は増加しているようだ。

「狂言 LABO」はこの10月、初の能楽堂での公演を行い、狂言に免疫のできた初心者を能楽堂デビューさせた。能楽堂に新しい観客を呼び込みたいという「狂言 LABO」の目標の、いわば中間到達点と言ってもよいだろう。能楽堂デビューした初心者を、次はどのような方向に向かわせるのか。「狂言 LABO」の活動には、今後も注目していきたい。

他にも、ホームページを作り公演の告知や演目の解説を行ったり、ブログやSNSなどで活動を紹介したりといった、現代の観客に合わせた努力をしている狂言師はひじょうに多い。だが、観客の獲得と同時にもうひとつ考えなければならないのは、観客を育てるということでもあろう。狂言を観ただけのおもしろいから笑う、という段階からステップアップし、その歴史や特色などの深い理解に基づいて狂言を観ることのできる、成熟した観客の育成は、狂言の将来にとって重要なことである。

観客の育成には、もちろん長い年月を必要とする。また時には、かなりレベルを下げて初心者につき合う必要も出てくるだろう。上演する側が準備に要する手間暇の負担は、相当なものになることも予想される。さらにネックとなるのは、ベテラン愛好者の存在である。ベテラン愛好者たちが、初心者の素直な反応に眉をひそめたり、批判的な態度をとったのでは、いつまで経っても、狂言は閉鎖的な印象を外部に与えたままとなってしまう。難しいことではあるが、ベテランと初心者の両方の層を満足させるようなプログラムの工夫が、今後ますます必要となる。

その一方で、狂言師は観客に媚びてはならないとも思う。古典的狂言の台詞に現代語を導入したり、設定を現代に置き換えたり、通常の型から逸脱し

たコント的動きをしたり、奇抜な装束でアピールしたり、といった本来の古典的狂言とかけ離れた形の狂言を演じたのでは、一時的に初心者を喜ばせることはできても、狂言の将来にとってプラスにはならない。むしろ、昔のまま演じることによって、なぜ六百年以上前に生まれた芸能が現代でも受け入れられるのか、と観客に考えさせることもでき、それが日本の文化や伝統に思いを至らせる一つのきっかけになる可能性も生む。そのためには、現代の感覚で作られた新作狂言と、古典的な狂言を併演して鑑賞してもらう形態も有効なのではないだろうか。

言葉の点で言うと、先述の対談の中で野村万作が「古典の言葉を判らせるために、舞台上で大袈裟な感情表現をしてしまうことがありますでしょう。でも、私はそこまでして判ってもらわなくてもいいと思うんですね。そこは、最終的には割り切らないとダメだと思います。」と述べているのは、傾聴に値する。鑑賞教室などで「茸」や「附子」を見た小学生たちが、言葉がすべて理解できているわけでもなくても大笑いしていることからわかる通り、演じられている内容が感覚的に理解できれば、狂言はある程度楽しめる芸能なのである。しかし、大人にはどうしても「すべてを理解したい、理解しなければ」という欲求が生じがちである。そこが、「能楽堂は敷居が高い」という感覚を人々にもたらす一因となっているのかもしれない。大筋だけを理解し、感覚的に楽しむことも狂言の楽しみ方としてあり得るのだ、ということ伝えるのも、一種の観客教育になるのではないだろうか。

さらに理解を深めたい観客には、観客自身に学習してもらうことも大切であろう。公演プログラムにあらすじや解説、語句の説明を載せたり、上演前に演者や研究者らによって解説が行われることは、かなり一般的になっているが、能の上演に際して最近よく目にするようになった、上演曲目に関する事前講座の類を行うのも有効かもしれない。

狂言の普及に関する活動は、これまで狂言の各家や、狂言師個人に任される傾向にあった。しかし、狂言の将来を考えれば、家や流儀の垣根を越え、狂言界全体を俯瞰した活動がさらに必要であろう。先述したような、若者が

狂言についての知識を得られるような充実したサイトの創設と運営、事前講座の開催など、演者と研究者や評論家とが連携してできる事業はさまざま考えられる。今後は、狂言に携わるすべての人間が狂言衰退の危機感を共有し、協力しあう活動が一層重要になってくるのではないだろうか。

(東京富士大学教授)

新作狂言一覽 (2006~2014)

* 2006年から2014年に上演された新作狂言を年代順にあげた。

* 「能楽タイムズ」の「今月の能」欄に「新作」として掲載されている曲を中心にまとめた。

* 台本作成者や演出者については、次のサイトなどを参考にして記載した。

「お豆腐狂言 茂山千五郎家」／「童司カンパニー」／「大蔵流狂言善竹家」／「和泉流野村万蔵家 萬狂言」／「万作の会」／「和泉流狂言師 小笠原匡」／「和泉流山脇派 狂言共同社」

「千葉大学」／「神戸学院大学」／「追手門学院 上町学ぶろじょくと」

「M & Oplays 森崎事務所」／「横浜演劇鑑賞協会」／「玉造小劇店」／「藤井組クリップ」／「藪内佐斗司の世界」／「日生劇場 にっせいぎっず」／「向日明神簀狂言」

「名古屋市文化振興事業団」／「名古屋堀川ライオンズクラブ」／「滋賀県文化振興事業団」／「茨木市文化振興財団」／「三股町立文化会館」他

年月	曲名	台本作成者	演出	主演	会名	備考
2006-03	シテやったり 太郎冠者	横内謙介	茂山千之丞	茂山千之丞	横浜演劇鑑賞協会第217回 観劇会	
	06-08 火入れ冠者	茂山千之丞	茂山千之丞	茂山千之丞	向日明神簀狂言	
2007-04	瓢箪	横山一真	野村万蔵	野村万蔵	萬狂言春公演	公募作品
07-07	鳴大家守	やまぎわちひろ	野村万蔵	小笠原匡	萬狂言夏公演	公募作品
07-08	わちゃわちゃ	わかぎあふ	茂山千之丞	茂山正邦	狂言なんかこわくない	
07-10	きれい好き	中村朋子	野村万蔵	野村万蔵	萬狂言秋公演	公募作品
07-11	夢の酒	帆足正規	茂山七五三	茂山七五三	茂山狂言会 笑の取極祭	
07-12	千葉の羽衣	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	房総発見伝 in 狂言	創作狂言と称す
07-12	夢てふものは	帆足正規	茂山千之丞	茂山千之丞	国立特別公演	国立能楽堂委嘱公演 宇治拾遺物語「夢買う人の 事」による
2008-01	鬼は内	中谷智喜	野村万蔵	野村扇丞	萬狂言冬公演	公募作品
08-03	姫の髻取り	松本薫	松本薫	茂山正邦	奴奈川能生狂言会	
08-06	歌ほめ	帆足正規	松本薫	茂山正邦	神戸学院大学グリーンフェ スティバル	書き下ろし新作落語ネタ狂 言と称す
08-09	夢つくり	やまかわさとみ	佐藤友彦	佐藤友彦	ゆめつくり狂言会	名古屋城本丸御殿復元着工 記念狂言会
08-11	鬼の来迎	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	房総発見伝 in 狂言	創作狂言と称す
08-12	勘当息子	善竹隆司	善竹隆司	善竹隆司	宝塚発～手塚漫画×善竹狂 言	手塚治虫「ブラックジャッ ク」による
2009-10	老人と木	善竹隆司	善竹隆司	善竹隆司	手塚漫画と善竹狂言	手塚治虫「ブラックジャッ ク」による
09-12	オトタチバナ ヒメ	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	房総発見伝 in 狂言	創作狂言と称す
09-12	太郎冠者立志 伝	HANAGATA	HANAGATA	茂山正邦	HANAGATA 09	
2010-04	落語「転失気」 より	茂山逸平	茂山逸平	茂山逸平	春蝶・逸平の一緒に遊びま SHOW	
10-06	大和西瓜	茂山千三郎	茂山千三郎	茂山千三郎	文楽と狂言と平成伎楽団の 宴	興福寺中金堂立柱式慶賛
10-07	えれきてる	帆足正規	茂山正邦	茂山茂	こどものためのおもしろ狂言	
10-08	ぶろぼおず	森崎一博	茂山正邦	茂山正邦	伝統の現在ダッシュ8	チャーホフ「結婚申し込み」 による
10-10	くじら			三宅右矩	昭島古式新能	
10-11	おさか	善竹隆司	善竹隆司	善竹隆司	追手門学院上町学プロジェクト	原案 河内厚郎
10-11	水戸黄門と敷 しらず	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	房総発見伝 in 狂言	創作狂言と称す
10-11	轍	やまかわさとみ	佐藤友彦	佐藤友彦	清洲越四百年記念狂言公演 会	

2011-02	鮎ずしの愛うつ	土田英生	茂山あきら	茂山宗彦	おうみ狂言図鑑	
11-08	熊	森崎一博	茂山正邦	茂山正邦	伝統の現在ダッシュ9	チェーホフ「熊」による
11-09	ある日の三英 傑安土城のイ ソップ	柳沢新治	小笠原匡	小笠原匡	狂言づくし	
11-10	つる	茂山逸平	茂山逸平	茂山逸平	春蝶・逸平の一緒に遊びま SHOW	落語「つる」による
2012-02	信楽たぬぎの 変身	藤井組	茂山あきら	茂山正邦	おうみ狂言図鑑	
12-08	はだかの殿様	松本薫	松本薫	茂山正邦	こどものためのおもしろ狂言	アンデルセン「裸の王様」に よる
12-09	警備員の悩み	土田英生	茂山茂	茂山茂	茂山狂言 HANAGATA	
12-09	鯉山の話	ごまのはえ	茂山逸平	茂山逸平	茂山狂言 HANAGATA	
12-09	是非に及ばず	土田英生	茂山宗彦	茂山宗彦	茂山狂言 HANAGATA	
12-09	伝統は絶えた	ごまのはえ	茂山正邦	茂山正邦	茂山狂言 HANAGATA	
12-10	犬の目	茂山逸平	茂山逸平	茂山逸平	春蝶・逸平の一緒に遊びま SHOW	落語「犬の目」による
12-11	食道楽	野村万作	野村万作	野村万作	万作を観る会	北大路魯山人「春夏秋冬料 理王国」所収 狂言「食道楽」 による
12-11	ラーメン忠臣 蔵～メンマの 逆襲～	茂山童司	茂山童司	茂山童司	大蔵流茂山狂言 笑いの座	
12-12	鬼来迎	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	見る、知る、伝える千葉～創 作狂言～	創作狂言と称す
12-12	ひめあそい	茂山逸平	茂山逸平	茂山童司	HANAGATA 12	能「葵上」による
12-12	BLACK & WHITE	茂山童司	茂山童司		HANAGATA 12	シテはなく、茂山逸平 童司 正邦 片岡孝太郎の出演 歌舞伎十八番「鳴神」による
12-12	手元にあるこ の三本の線を 辿るとその先 にあるのは貴 方か蔵か仏壇 かそれともこ こはいったい どこなんだ	茂山童司	茂山童司	茂山逸平	HANAGATA 12	
2013-03	続・鮎ずしの愛 うつ でっち羊 羹の陰謀	大和屋かほる	茂山あきら	茂山正邦	おうみ狂言図鑑	
13-04	異加さらえ	やまかわさとみ	佐藤友彦	佐藤融	なごや堀川狂言会	名古屋堀川ライオンズクラ ブ設立十周年記念狂言会
13-10	茨木童子	茂山千三郎	茂山千三郎	茂山童司	ふるさと茨木、再発見!	
13-12	はごろもかたり	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	見る、知る、伝える千葉～創 作狂言～	創作狂言と称す
2014-02	安土城ひみつ 会議	三千院高穂	茂山あきら	茂山七五三	おうみ狂言図鑑	
14-03	今際の淵	茂山童司	茂山童司	茂山正邦	マリコウジ巻ノ巻	
14-03	諸白ヶ内	茂山童司	茂山童司	茂山茂	マリコウジ巻ノ巻	
14-07	大福	中村豪	野村万蔵	野村万蔵	萬狂言夏 ファミリー狂言会	
14-08	いたりきたり	茂山逸平	茂山逸平	茂山逸平	春蝶・逸平の一緒に遊びま SHOW	落語「権助提灯」による
14-11	ヤマトケル とオトタチバ ナヒメ	小笠原匡	小笠原匡	小笠原匡	見る、知る、伝える千葉～創 作狂言～	創作狂言と称す